JICA ボランティア活動報告　4　　２０１７年６月

北橋　雅子

去年、私は「わからなくてもいいから、わかりたいと思ってほしい」という方針で教えました。その「わかりたい」思いを高く評価しようとしたのです。しかし、それは間違っていた、と今年、感じています。彼らはすでに、わかりたいと思ってもわからなかった、という実績を積んでおり、さらに、わからなくても進級できた実績もあるわけです。そんな彼らが、本当にわかったかどうか厳密に評価するべきでした。彼らがわからないことをはっきり認識してしまって、やる気を失くすことを恐れた私は、ちょっとでもわかった気にさせて、その上に積み重ねていこうと思っていました。しかし今年、積み重ねようとする、その土台の脆弱さを思い知らされました。

今更ながら、学生がどこまでわかって、どこからわからないのか、それを見極めることの難しさを感じています。この国の基礎教育の実態を把握しきれない私が、学生の基礎学力のレベルを認識できないまま、どうやって彼らの理解度を知ることができるでしょうか。去年、私が行ったテストができたからといって、それが彼らの理解を意味しないことを、今年、見せつけられてしまいました。

今、日本でも小学校からプログラミングや、コンピュータの動作原理を教えようとしています。すでに、アメリカ、イスラエル、エストニア等では、このような内容が義務教育化しているようです。小学生にプログラミングを教える術があるなら、基礎学力が十分でなくても、大学生に教えることは可能なはずです。私が今教えているのは、まさに小学生でもわかるような内容です。だから、全くわからないということはないはずだ、と思っていました。しかし、足し算もあやしい学生は、プログラミングの基本である配列やループの概念を全く理解できないようでした。

前回の報告でも少し書きましたが、小中高校を見学してみて、あまりにも無理が多すぎると感じます。教科書がないうえに、ノートも教科ごとではなく、全ての科目、１冊のノートを使っています。先生は必ずしも板書せず、口頭で説明して、それを書かせています。当然、子供たちは、後から復習できるようなノートを取ることはできません。先生が板書したとしても、質の悪い黒板に書かれた文字は読みにくく、１００人もいるクラスで、全員がきちんとノートを取れるようにすることは無理です。テストの前に、復習しようと思ってもできない状況です。

こういう環境で何年も過ごし、何回もテストを受けてきた彼らは、彼らなりのサバイバル方法を身につけています。去年、気持ちがかみ合っていると感じたのは、その彼らの戦略にはまっていただけだったような気がします。彼らは先生の意に沿う訓練を積んでいます。内容の理解はともかく、とにかく先生の意に沿ってさえいれば、それなりの成績がもらえるという経験を積んでいるのです。

割り算ができない、と前回の報告で書きました。足し算もあやしい学生がいます。小学校で計算練習を十分にしていないのだと思います。つまり、現地語の５進法と１０進法がごっちゃになった概念のおかげで、５の扱いが正しくできない学生がいるのです。十分な計算練習をしないまま、電卓を使うことを覚えてしまうので、頭のなかに１０進数の計算回路が育たないのだと思わ

れます。計算回路だけでなく、学ぶために必要な回路が育っていないから、配列やループが理解できないのだと思いました。

今年、１年生に、プログラミングの基本である配列やループの概念を理解させるために、足し算や引き算を繰り返し行うコードを見せて、そこにある値を与えた時に結果がどうなるか、コードを追いながら計算する、という練習をさせることにしました。何回も練習させてからテストをしました。テストをすると、どうしても、隣の回答を見てしまいます。自分の計算に自信を持てない、もしくは計算するのがめんどくさい学生は、隣の答えをコピーしてしまいます。これをやめろと言っても無理です。そこで、一人ひとりに異なる問題をつくりました。隣をコピーしたら必ず間違いになります。

このテスト結果は悲惨でした。できる学生とできない学生に分かれました。中間がないのです。できない学生は０点です。この差は、学ぶ回路があるかないかの差のように思われました。回路がある学生を伸ばさなければならない、と思いました。勉強する気があって、ある程度の基礎ができている学生です。テストを受けた学生の４分の１しかいません。学生の実力をはっきり示したこのテスト結果は、できる学生のやる気を促したと思います。

できない学生にとってはショックかもしれません。しかし、彼らはその現実に直面する必要がある、と信じることにしました。これに直面してあきらめるか、がんばるか、彼らしだいです。

６月でセメスターが終了します。７月はお休み。８月から次のセメスターです。大学は、半期ごと、つまりセメスターごとに新入生を受け入れます。そして半期ごとに卒業生がいます。来期も、新入生に教えることにしています。そして、半期を終了した１年生のやる気のある学生のためのコースをやる予定です。

＊　＊　＊　＊　＊

短期ボランティアで、バイオリニストの江頭さんが、モザンビークにやってきました。彼女とコラボして、絵本の読み聞かせイベントを企画しました。前回、「ししときつね」というお話を翻訳して中学校で読み聞かせしたことを書きました。その「ししときつね」を、今度は、日本語を勉強している学生に、日本語、シャンガナ、ポルトガル語で読んでもらいました。それに江頭さんが効果音と挿入音楽をつけてくれました。

シャンガナは、文字がない言葉です。私達日本人ボランティアが、シャンガナを覚えるために、カタカナで記述しますが、日本語にもポルトガル語にもない音があります。さらに、同じシャンガナでも、地域が違うと微妙に発音が変わります。語学に堪能なモザンビーク人が、シャンガナ訳をかってでてくれました。英語のアルファベットでシャンガナを表記してくれたのですが、正式な表記法があるわけではないので、人によって、同じ音でも表記が違ったりするそうです。

大学の学生達はシャンガナがあまりできません。大学に来るということは、いわゆるエリートなのですが、ということはつまり、シャンガナを捨てて、ポルトガル語や他の言語を身に着けた、ということなのです。日本語を勉強している学生に、アルファベット表記のシャンガナを見せても、彼らはそれを読むことができませんでした。一人だけ、きれいに読んでくれる学生がいました。彼には、他の学生達のような、コンプレックスがないようでした。私が今まで小中学校を見

学した感じでは、学年が上がるに従って現地語に対するコンプレックスが強くなるようでした。先生には、しっかりコンプレックスがあると感じました。子供たちにコンプレックスを抱かせる言語教育でなく、現地語を尊重した上での国語としてのポルトガル語教育ができないものでしょうか。シャンガナとポルトガル語による絵本の読み聞かせが、その一助になれないでしょうか。

絵本の読み聞かせイベントの会場は大学のイベントホールだったのですが、このホールの予約でトラブルがありました。トラブルというか、いつものことなので、やっぱり、という感じなのですが、前日になって、ダブルブッキングが発覚したのです。このダブルブッキングはなかなか避けられません。要するに、予約を入れる人の力関係で決まるみたいな感じです。いくら予約しててても、後から強い人が来たら取られちゃう、って感じ。今回はロゼッタ先生がうまく交渉してくれて、なんとかなりました。私もロゼッタ先生も、ホールの確保が本当にできるかどうか、ずっとハラハラしていたのです。ロゼッタ先生はいつもは低血圧で、よく医者にかかってるそうですが、このイベントの前は血圧が上がって、医者がびっくりしてたそうです。

シャンガナで絵本を読んでいるエドソンくん

おかげさまで、イベントはうまくいきました。学生達も楽しんでくれたようです。一回だけではもったいないので、市内の孤児院でもやらせてもらいました。カトリック教会が運営している女子だけの孤児院で小学生から高校生までいます。残念ながら学生達は来られなかったので、私と江頭さんの二人でやりました。

学生達と、寄付してもらった絵本のお礼ビデオをつくりました。以下のサイトを見て下さい。ビデオの中で、複数の学生がアニメが好きだ、と話してます。日本のアニメの力はすごいです。そのおかげで、この学生達は日本語に興味を持ったんですから。上の写真のエドソンくんも、アニメが大好きです。アニメのおかげか、みんな日本語の発音はとてもきれいです。

https://youtu.be/SEM3_9zWX8I